

Title	アーバンイズム理論とサバービア
Sub Title	Theory of urbanism and suburbia
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1975
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.15 (1975.) ,p.9- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000015-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーバニズム理論とサバービア

Theory of Urbanism and Suburbia

藤 田 弘 夫

Hiroo Fujita

〔一〕 問題提起

シカゴ学派都市研究の黄金時代が過ぎ去ろうとした1938年に、アメリカ社会学雑誌紙上に表われたワース(Louis Wirth)の「生活の様式としてのアーバニズム」と題された論文は都市研究を、パーク(R. E. Park)やマッケンジー(R. D. McKenzie)に代表される人間生態学(Human Ecology)を方法論とする狭い視角から、人間生態学を基礎としながらも、社会構成(Social Organization)や社会心理(Social Psychology)にまで視野を拡大した点で画期的なものであった。以後、このアーバニズム理論はその理論的な未整備にもかかわらず、広く世界の都市社会学研究の指導書になった。しかし、この論文発表以後35年の間にアーバニズム理論はあらゆる角度からおびただしい批判を受けたのである。これらの批判のいくつかはアーバニズム理論の基本的命題のいくつかを瓦解させた。にもかかわらず、アーバニズム理論は現在でも最も有効な都市理論としての生命を保ち続けているのである。¹⁾

同時にこの35年間に、アメリカの諸都市も大きな変化を遂げた。とりわけサバーバニゼーションの進行は都市の地域構造に根本的な変化を与えた。マソッティ(Louis Masotti)によれば、1960年から1970年の間に、サバービアの人口が38%増加したのに対して中心都市は6%増加したにすぎない。今やサバービアの人口は、全メトロポリタンエリアの57%を占めるに至っている。この数値は全国民の38%がサバービアに住んでいることを意味しているのである。²⁾ サバーバニゼーションの進行は、何も

最近始ったものではない。だが、われわれが現在見るように、都市が広大なサバービアを含んだ地域構造を形成するに至ったのは、1920年代と第2次世界大戦後に生じた爆発的なサバーバニゼーションによってである。

私は本稿でサバーバニゼーションの進行による都市の地域構造の変化が、アーバニズム理論にどのような新たな方向づけを必要としているのかを、都市と全体社会の関連からサバービアを分析する。以下本稿の概略を明らかにすると、〔二〕では世紀初頭以来のアメリカのメトロポリタンエリアの形成過程を主に生態学的観点から考察する。〔三〕では〔二〕で論じられたメトロポリタンエリアから、本稿で分析するサバービアを抽出する。

〔四〕は〔三〕で抽出されたサバービアの生態学的構造を〔二〕と重複しない限りで全体社会との関連から考察する。〔五〕では〔二〕で抽出されたサバービアを社会構成論的視角から、〔六〕では社会心理学的視角からそれぞれ考察する。つまり、〔四〕〔五〕〔六〕はワースの三重図式にあたるものである。最後の〔七〕では〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕で論ぜられてきた問題を〔一〕で設定された問題との関連で本稿の結論づけを行なう。

〔二〕 メトロポリタンエリアの成長

20世紀初頭のアメリカの諸都市は、まだ殆んどが小規模なものであり自己完結的なものであった。大都市の住民でさえ、大部分は職場の近くに住んでいたのである。しかし、時間と経済に余裕のある人々は鉄道を通勤に利用することによって、高密度の市街地から外縁部に移動しはじめていた。こうして形成された世紀初頭の大都市

は葉状、または星状の物理的居住形態によって特徴づけられていた。⁸²

第1次世界大戦はアメリカの都市にも大きな影響を与えた。移民制限法の成立は、都市の人口増加に大きな役割を果たしていた海外からの移民を大きく減少させた。にもかかわらず、戦時下の経済は都市の工業に生産の増大を要求したため、都市は以前にも増して経済活動のための人材を農村部に依存した。更に決定的な変化は自動車の急激な増加である。戦時下で発達した大量生産の技術は、まず自動車工業に導入された。一方、あらゆる行政のレベルで莫大な資本が自動車道路建設のために投下されていったのである。

1920年代を通じての経済規模の拡大は必然的に、都市の地域構造の変化、都市相互の結びつき、都市と農村の関係の変化をもたらした。都市は自動車の増大を媒介としながら機関を離心(decentralization)させ、人口を分散(deconcentration)させていった。⁸³ 電話やラジオによるコミュニケーションの革新は、管理や支配の機能を都心部(Central Business District 以下 C.B.D. と略す)に置いたままで、工場を都市の外縁部に移動させることを可能にした。しかし、工場の離心を促した最も大きな要因は、技術革新による大量生産の原理が、従来遷移地帯において存在した二三階建の工場よりも、広い敷地での一階建の工場を必要としたためである。⁸⁴ 更に大量生産の原理は、これに適合する分配機構を整備する一方、管理や支配の機関は他の管理や支配の機関と容易に接触するため益々 C.B.D. に集積していった。⁸⁵

1930年代の不景気は都市人口の増加を急速に減少させた。それでもメトロポリタンエリアの成長がマイナスになったわけではなかった。経済に壊滅的な打撃を与えた恐慌期においてさえも、メトロポリタニゼーションは依然として進んでいたのである。景気の回復と共にメトロポリタニゼーションは、再び活発になった。しかし、第2次世界大戦中は若干成長速度をゆるめている。このことが逆に戦後の成長を一層急激なものにする準備をなすことになったのである。

第2次大戦後のメトロポリタンエリアの成長は1920年代よりも一層深く広範囲にわたるものであった。ボグ(Donald J. Bogue)は1940年から1950年までのアメリカの人口増加の実に80.6%までが、メトロポリタンエリアでの増加であることを伝えている。しかも、この成長率は外縁部ほど高い数値を示すのである。⁸⁶ 大戦後のメトロポリタニゼーションによっても、都市の物理的形態は、まだわずかに古い葉状や星状のパターンを残存させ

てはいたが、居住密度に関する限り、この型は全く無定型なものになっていた。⁸⁷ 更に1960年以降は中心都市の人口増加が年率1%以下になる一方で、中心都市以外のメトロポリタンエリアは年率3~4%の増加を示すようになる。これを百貨店の売上に例をとると、C.B.D.の百貨店の売上げは1958年から1963年の間にインフレにもかかわらず2%下落する一方、C.B.D.以外の百貨店の売上げは125%も上昇しているのである。⁸⁸

〔三〕 サバービアの概念規定¹⁰⁾

ここではメトロポリタンエリア内において、サバービアとしばしば混同して使用されてきた類似概念である衛星都市(Satellite City)や周辺(Fringe)を主に生態学的な観点から、サバービアとの論理的な区分を試みる。¹¹⁾ サバービアの本格的な研究は、ダグラス(H. Douglass)によってはじめられた。彼は生産のサバードと消費のサバードという言葉によって、最初に明確なサバービアの類型化を行なった。ダグラスによる区分はその後ハリス(C. Harris)リース(A. J. Reiss)マーチン(W. Martin)等によって、かなり一般的に採用されている。こうしたサバービアの類型化に対して、マーチンの定義をより厳密に論理的に、コミュニティの構造と機能の観点から住宅型のサバードと雇用の衛星都市に整理しなおしたのがシュノア(L. Schnore)である。彼はコミュニティの構造に関して、サバードと衛星都市をメトロポリタンコミュニティの運動の盛衰を軸に区分する。サバードと衛星都市とは共にメトロポリタンエリアの他の部分と同様、コミュニティ活動の毎日のリズムをなしている商品と人々の内的循環の源であり到着地である。しかし、彼によればこの点こそがこの2つの類型を最も明確に区分できるところなのである。つまり、財やサービスは雇用の衛星都市から他の地域に流出する。人々は労働のために衛星都市に引きつけられるのである。これに対して住宅型のサバードは、労働者を送り出し住民によって消費される財とサービスの流入を受ける。この区分をコミュニティの機能に関して要約すれば住宅型のサバードは労働力を供給し日用品を消費する。他方雇用の衛星都市は労働力を消費し日用品を供給するといっているのである。¹²⁾

次にクルツ(Kurz)とアイハー(Eicher)によって、「周辺とサバードスーその諸概念の混同」という論文が現われているほどサバービアと混同して使用されてきた周辺(Fringe)について考察する。¹³⁾ 私はサバービアと周辺とはレベルの違ったものとして把握する。前述のようにサバービアと衛星都市は、共に都市の内的分化に

よって生じた都市の下位地域 (sub area) である。しかし、周辺はサバービアや衛星都市とは異なり文字どおり都市と農村の接触地帯なのである。周辺は今後の中心都市の発展次第によっては、生態学的に言えば侵入 (invasion) の段階から代置 (succession) の段階に移行することによって、サバービアになるかもしれないし、衛星都市になるかもしれない。しかし、少なくとも現在は都市の下位地域というような性格の場所ではない。だが都市からの侵入がかなり多く見られる地域なのである。

〔四〕 生態学的視角のサバーバニズム

最初の本格的なサバーバニゼーションの時代である1920年代に建設されたサバービアは、大部分が未整備の土地だけを販売するものであった。当時サバービアに土地を購入した人達は、家を建てることはもちろん道路下水等の整備もしなければならなかった。このため分譲された土地のすべてに家が建てられたわけではなかった。当時既に宅地市場は慢性的に供給過剰になっていた。¹⁴⁾ このため1930年代の経済恐慌の到来と共に、サバービアの建設は急速に衰えて行ったのである。

しかし、経済的な繁栄が舞いもどってくると共にサバービアの建設は再び活発になった。この動きは最初ゆるやかなものであったが、徐々に着実な量的拡大を伴いながら進行してきたのである。ここで重要なことは連邦政府が不景気に対して、サバービアの建設を促進させる方向で景気の回復をはかったことである。連邦政府は F.H.A. (連邦住宅局) や V.A. (在郷軍人局) を設立し持家政策を展開していった。F.H.A. や V.A. は購入した家を抵当にして、保険・税金・利子等の全額を月賦で償却させようというものであった。しかも、F.H.A. や V.A. の月賦は民間の金融機関に比較して、低金利と長期の支払期間によって特徴づけられた。一方サバービアの建設業者はこうした持家政策に、以前の土地だけの販売から大量生産による画一的な家を完成後に販売するというやり方で対応していった。こうしてサバービアの建設は、第2次世界大戦勃発へと進んでいく時代に再び活発になった。そしてサバーバニゼーションの進行は大戦中若干その速度をゆるめた後、戦後の爆発的進行を迎えるのである。

戦後の爆発的なサバーバニゼーションを可能にした第1の要因は経済成長である。経済成長は多くの点でサバービアの拡大に貢献したが、とりわけ投下資本の増大と他部門における利益率の減少は大きな役割を果たした。戦後の経済成長が如何に大きなものであったかを国民所得

を例にとると、1940年に1人当たり576ドルであったものが1956年には、多少のインフレを含んではいたが1708ドルになっていた。つまり、1956年度のアメリカ人1所帯当りの平均所得は4250ドルにまで達していたのである。¹⁵⁾ 更に中産階級にとっては、富の再分配の浸透という観点からも、所得の増大は上記の数字以上のものであった。¹⁶⁾ そして、民間の金融機関も中産階級に対して経済的繁栄にともなう金利の低下によって、F.H.A. や V.A. よりも更に低い金利での資金の貸出をはじめようになった。またインフレの進行は、中産階級に自分達を破綻に導く可能性のあるサバービアでの家の購入を勇気づけた。

更に大戦後の連邦政府による家賃統制政策は賃貸住宅の減少をもたらした。また大戦後は税制の変化によって、家以外での財産保有はかなりの財産税を覚悟しなければならなくなっていた。しかも、かなり広範囲の家主がアパートが痛むのを恐れて、アパート入居者は子供を持たないという規則を採用しはじめていたのである。¹⁷⁾ また経済的繁栄による結婚年令の低下と帰還兵による世帯の形成、人口構成に起因する世帯形成率の上昇等によって、戦後のベビーブームはなかなか衰えなかった。また自動車の普及、道路や大衆交通機関の整備、電話代の割引、更に自動ヒーティング・冷蔵庫・自動芝刈機等の技術革新によって、サバービアでの1戸建の家も事実上市街地と同じくらい便利になっていた。¹⁸⁾ こうして経済的繁栄と技術革新によって基礎づけられた拡大過程にある戦後のアメリカの家族は制度的変化に支えられながら大量にサバービアに流れ込んだのである。

〔五〕 社会構成論的視角のサバーバニズム

子供のない家族が都市のどの地域にも平均して住んでいるのに対して、サバービアの家族はほとんどの場合子供を家族の構成員として含んでいるのである。新婚の夫婦は仕事や娯楽の機関と近接性 (accessibility) を保つためにめったに最初の住居をサバービアに定めない。ガンズ (Herbert J. Gans) によれば、彼らがサバービアに移動してくるのは最初の子供が生まれた後か、第2番目の子供が生まれると思われた時期である。¹⁹⁾ 中心都市からサバービアに移動する家族がこうした特徴を持っているのに対して、サバービアから中心都市に移動する家族は子供が成長して独立したとか、夫婦の一方が死んだとか、離婚した場合が多い。²⁰⁾ このような家族形態において営まれるサバーバナイトの生活は、何よりもまず子供中心の拡大された家族機能によって特徴づけられる。²¹⁾ サバービアにおける主婦の雇用に関する統計は、サバー

ピアでの主婦の雇用率がわずかに9%とアメリカの平均雇用率27%に比較してきわめて低いことを示している。しかも、この9%の数値のうち全時間労働は5分の2だけであって、残りはパートタイムなのである。つまり、サバーバナイトの妻の役割はもっぱら主婦業であり、この役割からの逸脱はきわめてまれなのである。²²⁾

新しく建設されたサバーピアに移動してきたサバーバナイト達は、市街地で長年にわたって築きあげられてきたのと同様のコミュニティ組織を短期間で形成する必要があるため数々の会合を開く。サバーピアでの近隣(Neighborhood)はこのため最初強い団結心を持ってはじまるのである。更にサバーピアでの近隣は通常指導者になるであろう老人が少ないことによって強められる。しかし、こうした強い近隣の形成を背後から支えているのは、サバーバナイト達の年令・所得・職業等の同質性が近隣活動によって連帯を促進するような利害と先入主を持っていることである。²³⁾更にサバーピアの物理的構造も建設業者によって、強い近隣を強いるように作られているのである。サバーピアの近隣はまた外部での活動によっても強められる傾向がある。子供達は同じ学校、同じ教会に行き、大人達は同じ催しに参加する。しかも、これらの一般的なコミュニティの行事に参加しない家族はサバーピアにあっては威信を保てないのである。ニューヨーク・メトロポリタンエリアの近隣を研究したファヴァ(Sylvia Fleis Fava)も、ニューヨークの市街地に比較してサバーピアでは近隣が強い機能を果していることを明らかにした。²⁴⁾このためサバーピア建設後、一応の近隣が形成された後で新しくサバーピアに移動してきた人達はサバーピアでの新しい生活様式に適應しなければならぬ。つまり、サバーピアは第2のつぼとしての性格を持っているのである。²⁵⁾

サバーピアの社会構成の特徴は、拡大された家族機能と強い近隣ともう一つ中心都市で非常に強い機能を果した階級の衰弱である。サバーバナイトの大部分は技術者であり中間の管理職であり若い法律家であり教育家であり公務員である。こうした職業のほとんどは大学教育を必要としており、それゆえ彼らは十分に教育された人々である。ホーリー(Amos Hawley)によればサバーピアに移動していく人達は、中心都市の人達よりも平均して1~2年教育期間が長い。²⁶⁾高い教育を受けた人は当然のこととして子供の教育にも熱心である。このようにサバーバニゼーションに含まれている様々な選択性の中でも教育の選択はとりわけ重要である。つまり、サバーバナイトは大部分が、ホワイト(W. H. Whyte)によって

オーガニゼーション・マン(Organization Man)として描かれた新中産階級の人間なのである。ファヴァが「サバーバは大部分中産階級から成り立っている。最近の中産階級の職業の爆発の結果がサバーバへの移動を促進した。」と述べているように、アメリカにおけるアーバニゼーションの進行は同時に膨張する中産階級の都市外縁部での吸収過程としてのサバーバニゼーションを随伴したのである。²⁷⁾そして、サバーピアは後に述べるようにアメリカ社会での組織的ヒエラルキーにおける約束された場所になっているのである。

〔六〕 社会心理学的視角のサバーバニズム

アメリカのサバーピアには神話がある。サバーピアに居住することは都市の便利さを享受しながら、生きた自然環境と常に接触を保っていくという人間本来の欲求を満たすことを意味する。サバーピアこそは都の中の鄙であり、鄙の中の都であるというのである。更に、サバーピアは単に自然環境に恵まれているだけではなく、同時に、そこは社会環境の悪化した中心都市と比較して、健全な再組織された同質的な社会環境が存在するというのである。リースマン(David Riesman)がサバーバニズムについて「アメリカ人にとってサバーピアの観念というのはきわめて単純であって、それはバイブルに描かれた世界、農民生活、農村のイメージへの一般的な夢なのである。」と述べているように、歴史の中でアングロサクソンのアンティアーバニズムの伝統はアメリカの地にも、サバーピアの神話の土壌としての根を下していた。²⁸⁾しかし、こうした神話の広がりや直接刺激したのはアメリカ社会における高い地位をめぐる闘争である。上流階級は豊さの象徴として田舎に住むという習慣が長い間に培われていた。そして、良き生活の象徴としてのサバーバニズムはラジオ・テレビ・映画・雑誌・新聞等によって、魅力的に紹介されたのである。バーガー(Bennet Berger)はサバーピアの神話のこの広がりについて、「現代の最も人気ある文学作品の中にあるサバーピアなる言葉は、……最近の10年か12年の間に……満開の神話を生み出した。それは神聖なシンボルや未来への約束や究極的な疑問の解決を可能にした。神話の詳細は知的な定期刊行物や書籍や大衆雑誌にも盛んに紹介されている。つまり、神話は現代の文化的傾向に興味を持っているほとんどすべての人が知っている。」と述べている。²⁹⁾

〔四〕で述べた経済的な繁栄は中産階級の人達にも上流階級のまねをすることを可能にした。中産階級の人達はサバーピアに住むことによって自分達が社会的に上昇

しているのだという確心を得ることができた。中心都市へのマイノリティー・グループの流入もまたサバーバニゼーションに大きな役割を果たした。マイノリティー・グループの流入が増大すればするほど中産階級は、社会的威信と威光を守るためサバービアに移動した。とりわけこの流れが南部の綿花地帯に居た黒人を大量に含みはじめると、この傾向は益々顕著になった。中産階級の人達は続々とサバービアにくり出したのである。

シカゴ外縁部の代表的なサバービアであるパーク・リッジ (Park Ridge) とデス・プレインズ (Des Plains) を調査したウェンデル・ベル (Wendell Bell) は、ここに住む人達のサバービアへの移動の理由を表A・表Bのようにまとめた。³⁰⁾

表 A

サバーブへの移動の理由の大まかな分類	
子供のために良い	81%
生活をより楽しむため	77%
夫の仕事のため	21%
縁者に近い場所に住むため	14%
その他	3%
解答者が複数の理由を指摘したので総計は100%を超える。	

表 B

子供のために良いと解答した人達のより詳細な分類	
物理的な理由	=72.3%=
家外の広い空間	19.7%
室内の広い空間	14.3%
新鮮な空気と太陽等	12.6%
少ない交通量	11.8%
清潔である	6.3%
1戸建である	3.8%
静かである	2.1%
1階建である	1.7%
社会的な理由	=27.7%=
良い学校がある	10.2%
子供が遊ぶのに良い	9.2%
他の子供と遊ぶのに良い	2.5%
組織された活動がある	2.5%
自分の家である	1.7%
子供に大人の良さを知らせる	0.8%
良い教会がある	0.8%
総計	=100.0%=

1950年代のサバーバニゼーションは当時のきびしい冷

戦の国際情勢を反映して、アメリカ人がいつ核戦争が勃発するかかわからないという不安を持っていたことによっても助長された。同時に当時導入されつつあった週40時間あるいはそれ以下の労働時間、週5日制等もまたサバービアの神話に貢献した。2日間の休日や短い労働時間の毎日は、スポーツや親戚や隣人の訪問、子供と戯れることや庭の手入に費される。サバーバナイトは余暇を楽しく過ごすことができるというのである。つまり、サバーバニズムはアメリカ人にとって理想の生活様式であり、サバービアこそは長年のアメリカ人の夢を実現する約束された場所であるというのである。³¹⁾

〔七〕 結 論

バーガーは今までのサバービアについての研究報告が一部のサバービアに片寄っていたとして次のように述べる。「私はわれわれが今まで受けてきた(サバービア)についての報告がきわめて選択的なものであったことを言いたい。これらの報告のほとんどはニューヨーク州のレビットタウン・イリノイ州のパークフォレスト・ロスアンジェルス外縁部のレイクウッド・カナダのトロント外縁部の流行のサバーブである。」³²⁾ またモウラー (Ernest R. Mowrer) もサバービアは単一の家屋という点ではまだ神話の象徴が残っているけれども、サバービアは家族の点でも、コミュニティの点でも市街地的になってきたと、サバービアが建設後の時間の経過と共に、コミュニティの内部に変化をきたしていることを指摘している。³³⁾ 更にカーバー (H. Carver) リースマン・ホワイ・スタイン (R. Stein) 等によって、サバービアでの生活が疎外感に満ちたものであるとの報告がなされている。³⁴⁾ これらを踏まえるなら、本稿の結論も資料的な制約からある程度限定的なものにならざるを得ない。以下、私は〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕で明らかにしてきたサバービアの特徴を〔…〕で設定した問題と関連させながら本稿の結論づけを試みる。

人間生態学の立場からサバーバニゼーションを研究したシュノア (Leo F. Schnore) は自己の体験を次のように述べている。「サバーバニゼーションの問題に注目しているほとんどの研究者は、遠心的な運動の原因が究極的にはこの運動に含まれている個人の動機の中にあることを見出すであろう。しばしば反心理学的だと考えられている人間生態学者達でさえ、サバーバニゼーションに関しては動機説明論者に変化しがちである。われわれの訓練の一般的傾向と調和して、社会心理学はこの分野で社会学的アプローチにとって代りそうである。」³⁵⁾ シュ

ノアの言う社会学的アプローチとは、とりもなおさず人間生態学的アプローチである。つまり、この文章は人間生態学者を任ずるシュノアにあって、サバーバニゼーションの解明には人間生態学的研究からだけでは処理しきれない重要な問題が潜んでいることを告白しているのである。この論文で言えば〔五〕と〔六〕、とりわけ〔六〕は人間生態学者が直接の理論の枠外に置いてきた領域である。この意味でワースのアーバニズム理論における三重図式の果す役割は大きい。つまり、アーバニズム理論最大の成果は都市研究を人間生態学によるサブソシアルな研究から、社会構成や社会心理の視角にまで視野を拡大したことである。サバービアの研究もこの三重図式の使用によって、より精密な分析が可能になった。この論文の〔四〕〔五〕〔六〕もだいたいワースの三重図式を適用したものである。しかし、ワースのアーバニズム理論はガンズの指摘を待つまでもなく、都市を社会の実験室(The City as a Social Laboratory)と考えたシカゴ学派の伝統を受け継ぎ、もっぱら遷移地帯(zone in transition)の研究から生み出されたのである。世紀初頭以来続いてきたアメリカ諸都市の遠心的な成長は、都市の地域構造に根本的な変化を与えた。サバーバニゼーションの進行は都市生活の重心をサバービアに移動させた。このことは都市の社会学理論にとってとりわけ重要である。つまり、アーバニズム理論における都市の理念型が、さしあたって村落との対比から都市全体を抽象しようとするものである限り、遷移地帯の特徴を抽象することによって、都市の理念型を構成することは有効であろう。だが現在都市社会学に課せられている問題は、都市全体の特徴を明らかにするのはもちろんのこと、内的に分化した都市内のすべての下位地域(sub area)生態学的用語を用いるならば自然地域(natural area)にも適用できるものでなければならない。しかも、この論文で明らかにしてきたように都市内で遷移地帯とはきわだって違った特徴を持つサバービアは、サバーバニゼーションの結果、空間の広さの点でも人口の点でも都市全体に対してきわめて大きな比重を持つにいたっている。こうして見ると、都市生活の場としてのサバービアを捨象して都市の社会学理論を構成することは、理論も有効性を大きく減少させることになるだろう。更にワースが都市の定義を構成する人口の三変数(人口量・人口密度・人口の異質性)によって規定されたアーバニズムを独立変数とする時、アーバニズムの高度段階で現われるサバーバニズムも人口の変数に対して独立変数でなければならない。だがわれわれが既に考察してきたように、サバーバニズムの進行

はとでも都市内部の人口の変数からだけで説明できるものではない。ジョーバーク(Gideon Sjoberg)の指摘を待つまでもなく、都市は村落と共に全体社会のサブシステムである。サバーバニゼーションも全体社会のサブシステムとしての都市で発生した。あえて言うなら、アメリカのサバーバニゼーションはロストウ(W. W. Rostow)の高度大衆消費社会に対応する都市現象なのである。

註

- 1) 農村社会学者であるシンプソンですらワースのこの論文が、最近においても社会学雑誌に現われた最も重要な論文であると述べている。Richard L. Simpson, "Sociology of Community: Current States and Prospects" Rural Sociology Vol. 30 (June 1965) pp. 133.
- 2) Louis Masotti & J. K. Hadden (eds.), "The Urbanization of the Suburbs" Sage Publication Beverly Hill 1973 pp. 18.
- 3) Leo F. Schnore, "Metropolitan Growth and Decentralization" American Journal of Sociology Vol. 63 (September 1957) pp. 174.
- 4) Decentralization と Deconcentration という2つの類似する生態学概念について明確に区分したのはデッキンソンである。彼は Decentralization が工業や商業等の都市活動の移動であるのに対して Deconcentration は単なる住宅の移動であるとする。従って、彼の概念規定からするとサバーバニゼーションに対応する生態学概念は Deconcentration である。Robert E. Dickinson, "City and Region" Routledge & Kegan Paul London 1964, pp. 43-44. 木内信藏・矢崎武夫訳 "都市と広域" 鹿島出版会 pp. 49-50 こうした概念規定については R. N. Morris, "Urban Sociology" George Allen & Unwin London 1968 pp. 103-107 も参照。
- 5) Bennet Berger, "Myths of American Suburbia" R. E. Pahl (ed.), "Readings in Urban Sociology" Pergamon Press Oxford 1966 pp. 128.
- 6) Leo F. ScLnore, *op. cit.*, pp. 175.
- 7) Donald J. Bogue, "Urbanism in the United State 1950" American Journal of Sociology Vol. 60 (March 1955) in Hatt & Reiss(eds.), "Cities and Society" The Free Press 1957 pp. 94.
- 8) Leo F. Schnore, *op. cit.*, pp. 176.
- 9) 矢崎武夫, "激変の過程にある米國小売業の構造とその存立基盤" 販売革新 1973 7月号 pp. 249.
- 10) 英語で郊外を表わす単語にはサバーク(suburb)とサバービア(suburbia)がある。マソッティ・ガンズ・モウラー・バーガー等はこの2つの言葉を区分して用いている。たとえばバーガーはサバークの言葉をスタンダードメトロポリタンエリアの住宅の発達した地域を示すものとして、サバービアをそれらによって導びかれる生活様式を指示する言葉として

使用する。しかし、本稿ではこうした概念区分によって生ずる混乱を可能な限り避けるため2つの語を全く同じ意味で可能なかぎりサバービアに統一して使用する。ただし引用文献については、原著者の意味するところを正確に伝えるために原語のまま残した。

Bennet Berger, *op. cit.*, fn 7 pp. 122.

- 11) こうした問題について高橋勇悦氏によって詳細に紹介されている。高橋勇悦著「現代都市の社会学」誠信書房 pp. 99-124.
- 12) Leo F. Schnore, "Satellite and Suburbs" *Social Forces* Vol. 36 (December 1957) pp. 123-124.
- 13) R. A. Kurz & J. B. Eicher, "Fringe and Suburbs: A Confusion of Concepts" *Social Forces* Vol. 38 (October 1958) pp. 32-38.
- 14) Ernest R. Mowrer, "Family in Suburbia" in W. M. Dobriner, (ed.), "The Suburban Community" Putnams N.Y. 1958 pp. 148.
- 15) William M. Leonard, "Economic Aspect of Suburbanization" in W. M. Dobriner (ed.), *Ibid.*, pp. 182-183.
- 16) William M. Leonard, *Ibid.*, pp. 183 Table 1
- 17) Ernest R. Mowrer, *op. cit.*, pp. 150.
- 18) Amos H. Hawley, "Urban Society—an ecological approach—" The Ronald Press N.Y. 1971, pp. 181.
- 19) Herbert J. Gans, "Urbanism and Suburbanism as Ways of Life: A Re-evaluation of Definitions" in S. F. Fava (ed.), "Urbanism in World Perspective" Thomas Y. Crowell N.Y. 1968, pp. 68.
- 20) Amos H. Hawley, *op. cit.*, pp. 180.
- 21) ジャコとベルクナップはこうした家族が周辺 (Fringe) に出現しつつあるとして、その特徴を9つほどにまとめている。しかし、クルツとアイハーの批判にもあるように彼らの周辺の定義は広すぎる。周辺がサバービアを含んでしまっているのである。
- 22) Ernest R. Mowrer, *op. cit.*, pp. 158.
- 23) Bennet Berger, *op. cit.*, pp. 159.
- 24) S. F. Fava, "Contrasts in Neighboring: New York City and Suburban County" in W. M. Dobriner (ed.), *op. cit.*, pp. 122-131.
- 25) Bennet Berger, *op. cit.*, pp. 125.
- 26) Amos H. Hawley, *op. cit.*, pp. 183.
- 27) S. F. Fava, "Suburbanism as a Way of Life" *American Sociological Review* Vol. 21 (February 1956) pp. 34.
- 28) David Riesman, "Abundance for What and Other Essays" Doubleday & Company N.Y. 1964 加藤秀俊訳, "何のための豊かさ" みすず書房 pp. 131.
- 29) Bennet Berger, *op. cit.*, pp. 122.
- 30) Wendell Bell, "Familism and Suburbanization: One Test of Social Choice Hypothesis" *Rural Sociology* Vol. 21 (September-December, 1956) pp. 279.
- 31) Ernest R. Mowrer, *op. cit.*, pp. 153-154.
- 32) Bennet Berger, *op. cit.*, pp. 130.
- 33) Ernest R. Mowrer, *op. cit.*, pp. 161.
- 34) こうした見解をまとめたものとして William M. Dobriner, "Class in Suburbia" Prentice Hall N.Y. 1963.
- 35) Leo F. Schnore, "The Growth of Metropolitan Suburbs" *American Sociological Review* Vol. 22 (April 1957) pp. 170.